園長通信～こころ～ №５８

言葉

2024.6.27

「人物とは言葉である」というフレーズに出合った。「日頃どういう言葉を口にしているか。どういう言葉で人生をとらえ、世界を観ているか。その言葉の量と質が人物を決定し、それにふさわしい運命を招来する。運命を拓く言葉の重さを知らなければならない」と続く。

ちょうど今、「読解力が子どもを救う！」というタイトルで資料を作成している。これまでも、何度か同様の資料を作成してきた。人前で話すためである。今回は、今までの集大成という位置づけにした。ファイルしておいたすべての資料に目を通した。最新の情報も入手した。

こういった作業をすると、あれもこれもとなってしまう。そうなると、話を聞く方は、消化不良を起こしかねない。話を聞いてくれる対象に合わせて、取捨選択し、わかりやすく、おもしろく、ふかく、翻訳しなければならない。

長時間にわたり話す際には、聞く人の心に残るようなキーワード、キーフレーズがほしくなる。聞く人によって、どこに反応するかはわからない。そこで、印象に残るような言葉を散りばめるようになる。要は、その人にとってのワードとともに、内容が入っていけばいいわけである。

どんな言葉を選ぶか。そもそも言葉を知っていなければならない。そのために勉強しなければならない。以前から、言葉と出合ったときには、「名言手帳」にメモするようにしてきた。メモしておけば、後で見ることができる。話す相手に合わせて、名言手帳の中から言葉を選ぶようにしてきた。ただし、これは、生き方、人生論、哲学などに関してである。

読解力などの専門的な分野に関しては、手帳にメモなどはしていない。資料等をファイルして、いつでも見られるようにしている。キーワードやキーフレーズは、その中に眠っている。どれを使うかが、腕の見せ所となる。いくらかっこのいい言葉でも、相手に通じなければ意味はない。むずかしい言葉をそのまま伝えるのは、そう難しいことではない。しかし、相手には届かない。

人は、言葉に感動し、言葉で苦労し、言葉に感謝する。その人から出てくる言葉は、その人を背負っている。大岡信さんは、『言葉の力』の中で、次のように述べている。

ある人があるとき発した言葉がどんなに美しかったとしても、別の人がそれを用いたとき同じように美しいとは限らない。それは、言葉というものの本質が、口先だけのもの、語彙だけのものではなく、それを発している人間全体の世界をいやおうなしに背負ってしまうところにあるからである。人間全体が、ささやかな言葉の一つ一つに反映してしまうからである。

私の好きな文章の一節である。「人物とは言葉である」このことを、これからも大切にしていきたい。